名古屋学院大学論集　言語・文化篇　第32巻　第2号　pp. 23-36

〔論文〕

日本語における「が・の」交替とhigh adverbs*

赤　楚　治　之

名古屋学院大学外国語学部

要　旨

日本語の「が・の」交替の属格認可には，これまでC-headによるもの（C分析）とD-headによるもの（D分析）の二つの分析が提案されてきた。本稿ではD分析を擁護する立場から，D分析が説明できないと指摘されているhigh adverbsの問題を取り扱う。Chomsky（2013, 2015）のlabeling algorithmとSaito（2016）の反レベル付けを取り入れることにより，D分析のもう一つの問題であった主格目的語が関与する「が・の」交替に説明を与えたAkaso（2020）の分析が，D分析におけるhigh adverbsの生起問題をも解消できることを論じる。

キーワード：日本語生成統語論，「が・の」交替，D分析，high adverbs，labeling

Japanese Nominative-Genitive Conversion and high adverbs

Naoyuki AKASO

Faculty of Foreign Studies
Nagoya Gakuin University

*本研究はJSPS科研費JP19K00671の助成を受けたものである。　発行日　2021年3月31日
草稿の段階において，須川精致氏（本学）と戸澤隆広氏（北見工業大学）から貴重なコメントを頂いた。ここに記して感謝したい。

1. はじめに

syntax（統語論）が扱うべき研究対象として，case（格）が挙げられる。どのような構造に置かれるときに文法格が認可されるのか，生成文法の中心的な研究テーマの一つとなっている。格認可を論じる際に取り上げられる問題に格の交替がある。日本語では「太郎が英語｛が/を｝話せる」といった主格目的語構文に見られる主格・対格の交替がその典型であるが，連体節の中で現れる「が・の」交替もしばしば取り上げられる重要なリサーチトピックである。「が・の」交替の研究は，70年代初めに日本語研究に生成文法が導入されて以来，活発な議論がなされてきた。この交替を説明するために，これまで二つの分析がしのぎを削ってきた。NP分析とS分析である。生成文法の理論展開に伴い，80年代に機能範疇が導入されるようになり，それらの分析はそれぞれD分析，C分析に受け継がれるようになった。名称が変われども，ポイントは同じで，連体節の外側に存在する主要名詞が持つDが主語DPに属格を与えるのか，あるいは連体節の中にある何らかの要素（例えば，v-T-C融合体）が与えるのかという違いである。それぞれの分析には長所も短所もあり，どちらの分析が正しいのかについてはいまだに決着のついていないのが現状である。本稿の目的は，D分析を擁護する立場から，D分析の問題として指摘されてきた発話行為の副詞などの，いわゆるhigh adverbsの生起問題に説明を与えることである。本稿の構成は次の通りである。2節において，D分析に立ちはだかってきた三つの問題を取り上げる。一つ目の問題はMiyagawaによってすでに解決案が提示されている。3節では，二つ目の問題に対する解決案として提案されたAkaso（2020）の属格認可に関する研究を見る。4節ではAkaso（2020）の分析を採用すると，本論文のテーマである三つ目のhigh adverbsの問題が説明できることを論じる。5節は本論文のまとめとなる。

2. D分析の三つの問題

70年代前半から生成文法内でさかんに議論された「が・の」交替は，80年までに二つの分析方法が提案されていた。連体節が修飾する主要名詞が，連体節の中の主語に属格を与えるというNP分析と，Nakai（1980）が（1）のような例文で明らかにしたように，属格は連体節の中で与えられるとするS分析である。

（1）［s昨日太郎｛が/の｝読んだ］本

最初の語である「昨日」は明らかに連体節内の動詞「読んだ」を修飾する（「時の」）副詞であり，その左側に属格主語が現れているのは，NP分析では説明できないものであり，S分析の優位性を示すものとして捉えられている。

二つの分析は80年代以降，生成文法での機能範疇の提案・整備に伴い，それぞれD分析，C分析と呼ばれるようになった。90年代に入りMiyagawa（1993）がこの現象を取り上げたのを機に，

再び注目を浴びる現象となった。D分析にはMiyagawa（1993，2012，2017）やOchi（2001，2017，2020）の一連の研究があり，C分析としてはWatanabe（1996）やHiraiwa（2001，2005）が挙げられる。両分析には長所と短所があり，どちらの分析がより妥当なものかについてはいまだ決着がついていない。

本稿が擁護するD分析には，クリアしなければならない三つの問題があることが知られている。[1)]

一つ目は，Focusに関係する問題で，次のような例である。

（2）少し/昨日だけ　太郎の　飲んだ　薬

「の」格主語の連体節はFocus素性を有するCが欠けたものであるとするD分析では，（2）のfocus particle「だけ」の認可が説明できないという問題である。

二つ目が，いわゆる主格目的語が絡む「が・の」交替で，次のような例である。

（3）a.　太郎が　フランス語が　　話せること
　　b.　太郎が　フランス語の　　話せること
　　c.　太郎の　フランス語が　　話せること
　　d.　太郎の　フランス語の　　話せること

これらの問題については，それぞれ，Miyagawa（2017）とAkaso（2020）で，解決の可能性が論じられているので，3節でみることにする。そして三番目が，本稿のテーマである「の」格主語を持つ連体節に生じる「評価の副詞」などの発話行為の副詞，いわゆるhigh-adverbの生起問題である。D分析を主張するMiyagawa（2012：133–4）は,「の」格主語を持つ節のサイズが「が」格のそれとは異なり，CPを含んでいない根拠のひとつに,「幸いに（も）」のようなCP領域で認可される副詞，high adverbと共起できない事実を挙げている。

Further evidence for the CP-TP/*ga-no* distinction comes from the types of adverbials that may occur. Cinque (1999) holds that speech-act, evaluative, and evidential adverbials (‘honestly’, ‘unfortunately’, ‘evidently’) occur in the CP region, while, for example, “modal” adverbials such as ‘probably’ occur lower, possibly in the TP region. Note the following (thanks to Heizo Nakajima for these observations).

1）問題の指摘に関しては，Ochi（2017）やShimamura（2019）を参照のこと。

（26）a. [saiwai-ni　Taroo-ga/*-no　yomu] hon
fortunately Taro-Nom/-Gen read　book
‘the book that Taro will fortunately read’

b. [kanarazu　Taroo-ga/-no　yomu] hon
for certain　Taro-Nom/-Gen read　book
‘the book that Taro will read for certain’

In (26a), we see that with the CP adverbial ‘fortunately’, only the nominative subject is possible, suggesting that there is no CP structure with the genitive subject, while in (26b), with the TP adverbial ‘probably’, either the nominative or the genitive subject is possible.

しかしながら，この判断について，Nambu（2012：222）は，次のようなデータを示し，母語話者の間でも揺れがあることを指摘している。Ochi（2020）もその判断は微妙であることを指摘している。

（4）Naomi-wa [saiwai-ni　keesatu-{ga/no}　mituke-ta] saifu-o　kooban-ni
Naomi-top fortunate-cop. adv　police-nom/gen　find-past　wallet-acc　police. station-to
toriniit-ta
pick. up-past
‘Naomi picked up a wallet at the police station that fortunately, the police found.’

それらの指摘を受けてか，Miyagawa（2017：190）では，注としてではあるが，high adverbsの生起に関しては話者の間で判断の揺れがあることを次のように認めている。

…I should also note that, more recently, I have consulted with a large number of speakers about this difference, and I found that while some got the distinction, many did not; the latter found [26a] with *-no* not so bad.

多くの話者が容認すると認める一方で，なぜそうなるのかについてはMiyagawa（2017）では触れられていない。この事実は，D分析に大きな痛手となる。high adverbsを許容しないグループの人たちのデータはMiyagawaの主張するD分析で説明できるが，Miyagawaの分析ではhigh adverbsが許される節サイズはCPとなるので，その場合の「の」格は何によって認可されるのかという問題に突き当たることになる。さらに，なぜそのような揺れが生じるのかも考えなければならない問題となる。

3. Miyagawa（2017）とAkaso（2020）

本節では，前節でみたD分析の問題点（一つは，Focusを認可するCがないとされる「の」格節の副詞にfocus particleが生じるということ，そしてもう一つが主格目的語（nominative objects）を用いた場合の「が•の」交替の問題である。）を扱ったMiyagawa（2017）とAkaso（2020）の解決方法をそれぞれみることにする。

Ochi（2017）は，これまでの「が•の」交替研究を概観できる優れた論考であるが，その中で，D分析の問題点を二つ取り上げている。一つは，Focusを認可するCがないとされる「の」格節の副詞にfocus particleが生じるということ，そしてもう一つが主格目的語（nominative objects）を用いた場合の「が・の」交替の問題である。[2] Akaso（2020）が取り扱ったのは，その二番目の問題である。

まず一つ目の問題であるが，Miyagawa（2017）は，以下のような分析を提示している。問題となるデータは次のような対比である。

（5）a. 太郎だけが/*の　飲んだ　薬
　　b. 少し/昨日だけ　太郎が/の　飲んだ　薬（＝（2））

（5a）については，Akaso and Haraguchi（2011）は，「の」格主語を持つ連体節はTPなので，Focus Phrase（FocP）がないために，focus particle「だけ」を認可できないことから説明をしている。ところが，（5b）は「だけ」が連体節内に生起しているにもかかわらず，文法的となる。「だけ」が付いている要素（「少し」「昨日」）は連体節内の動詞を修飾する副詞であるので，（5a）と同様に，Cがない（つまりFocPを含むCP領域がない）属格主語の連体節に「だけ」が現れることができないはずである。

この問題について，Miyagawa（2017）は興味深い分析を展開している。Miyagawa et al.（2016）の研究から，次のような条件を提案している。

（6）Activation condition of the focus feature for agreement
An interpretable focus feature, [iFOC], on an XP becomes visible for Agree with some higher head carrying [uFOC] in T or any other functional head that inherits this probing feature from C if and only if the XP is in another (case-) agreement relation with the head.

つまり，Focus素性の認可は，格が関与するDP（＝項）の場合には，格の認可が行われたあとになされなければならないというものである。格の認可を必要としない付加詞（adjunct）の場

2）主格目的語が絡む問題については，Miyagawa自身も把握しており，今後の研究に委ねるとしている（Miyagawa（2012：165））。

合は，その限りではなく，Focus素性の認可が必要でないという。そのために，（5a）と（5b）のような対比が生ずると説明している。この分析が正しければ，Ochi（2017）が挙げた一つ目の問題はクリアできることとなる。

二つ目の問題は，主格目的語を用いる連体節でも「が・の」交替が起きるという事実である。次例が示すように主格目的語が現れうる連体節では四つの格パタンが可能となる。

（7）a. 太郎が　フランス語が　話せる　こと　　［主格–主格］
　　b. 太郎が　フランス語の　話せる　こと　　［主格–属格］
　　c. 太郎の　フランス語が　話せる　こと　　［属格–主格］
　　d. 太郎の　フランス語の　話せる　こと　　［属格–属格］

Maki et al.（2006）が指摘するように，容認可能性が落ちるパタンを文法的とは認めない立場があるかもしれないが，先行文献では，この四つのパタンはすべて文法的であるとされるものが多く，ここでもそれを踏襲する。Miyagawaの分析では，主格はCあるいはそれから格素性を引き継ぐTが，領域内のDPにvalueを与えることになるので，（7a）の場合は，そのC（もしくはT）が内項（目的語）にも外項（主語）にも主格のvalueを与えるということになる。同様に，属格はD分析では，連体節の外側に位置する主要名詞句のDからvalueを与えるということになるので，（7d）の場合は，外項はDによる認可を受ける。それに対し，内項である目的語の「の」格は，Miyagawaが「依存時制の属格（the Genitive of Dependent Tense）（GDT）」と呼ぶ，*v*によって認可されるある種特別な属格であると考えられる。このGDTのもとになる観察を見よう。次のように，非対格動詞（Theme項を主語にとる動詞）の場合には，主要名詞句のない場合でも「が・の」交替が可能となる場合がある（Miyagawa（2012：152）。

（8）a. 子供が/の来た時，隣の部屋にいた。
　　b. 風でドアが/の開いた時，誰も気づかなかった。

他方，非能格動詞の場合には属格は非文となる。

（9）子供が/*の笑った時，隣の部屋にいた。

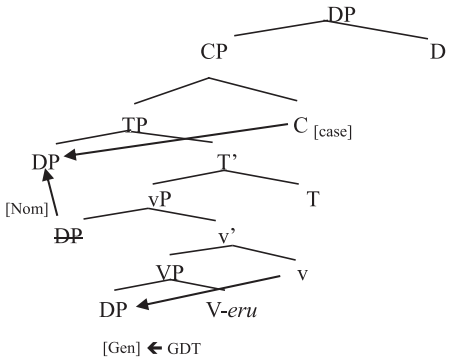
Miyagawaはこの現象をロシア語などのスラブ語の言語で否定の環境で見られる属格と結びつけて分析をしている。その関連性並びに，この現象自体についてはまだ詰めるべき点があると考えられるが，本稿では，Miyagawaのこの提案を受け入れることにする。次の（10）が示すように，可能の形態素–*eru*の付加により目的語が「が」格によってマークされる場合においても，同様の「の」格が観察される。

（10）（今ではすっかり英語を忘れてしまった太郎だが）太郎が（まだ）英語が・の話せた時，よくアメリカに電話をかけていたのを覚えている。

このGDTを用いると，同じ格を用いる（7d）は，問題なく処理できる。では，それぞれの格が異なる（7b）と（7c）はどうなるであろうか。Miyagawaの分析は節の大きさ（TPかCPか）によって，認可子が異なるために，両方（外項と内項）の格が同時に現れる場合には問題となる。

しかしながら，実のところ，そのうちの「主格–属格」のパタンである（7b）はGDTを採用すると問題とはならない。次の（11）が（7b）の構造となる。

（11）



内項である目的語DPの属格は，GDTに従い，vによって認可されることになる。主語の主格は，通常通りCもしくはそこから格素性の継承を受けたTが主語DPの格を認可することになる。そうなると，四つのパタンのうち，三つ（（7a，b，d））は問題なくクリアできる。

しかし，（7c）は，依然，問題として残る。内項の主格は，CもしくはTが認可することとなると連体節の範疇はCPということになる。そうなると，連体節の外側に位置するD-headが，CP内にある主語DPの属格を認可できないことになるからである。なぜなら，日本語においてCPを超えた長距離格付与は通常はないとされている。[3] この問題に取り組んだのがAkaso（2020）である。

Akaso（2020）はChomsky（2013，2015）のlabeling algorithmとSaito（2016）の反ラベル付け（anti-labeling）特性の分析を取り入れることによって，Ochiが指摘した二番目の主格目的語を含む連体節に見られる「が・の」交替に対しても，D分析が有効であることを示したものである。

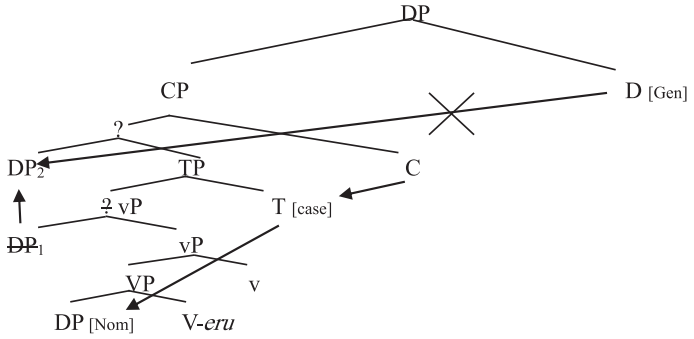
Chomsky（2013，2015）で提案されたlabeling algorithmは，mergeの操作とラベル付けの操作を独立させたものである。Saito（2016）のanti-labelingは，簡単に言えば，格助詞や後置詞がDPに付いた場合，labelingには関与しないという仮説である。この二つを用いると，問題となる属格・主格タイプの「が・の」交替は説明が可能となるとAkasoは主張する。

まず，次のように，主格目的語（内項）はCから格素性を継承したTが主格を認可するのに対

3） Ura（2007）が関西方言に見られる長距離格付与を分析している。しかし，これについては，畠山他（2008）などの批判がある。

し，外項のDPはCP内のTP指定部に位置するので，Dが主語DPにAgreeすることができない。（PIC違反となる。）

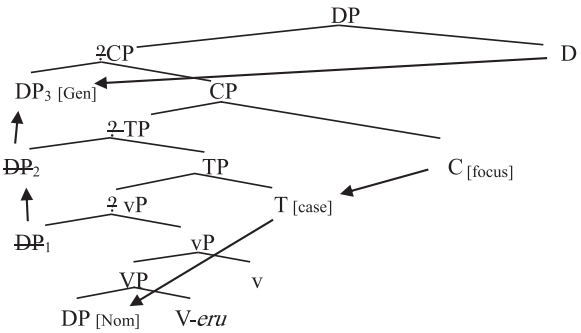
（12）



文法的である属格・主格パタンは，このような派生では収束できないので，別の派生を考える必要がある。

では，他の手立てはあるのであろうか？　それがlabeling algorithmのsymmetry-breaking movementである。{DP, TP} のセットは, Minimal researchではhead（あるいはその素性）が同じ深さにあるので，唯一的にどちらのheadがラベルとなるかが決められないという，いわゆるXP-YP問題，あるいは，problem of projection（POP）問題に直面する。それを防ぐには，それぞれのheadの持つ共通した素性を選び出す方法があるが, この場合, その方法では解決できない。ラベルが未定の状態を避けるために，もう一つのoptionである, 二つのうちのどちらかが移動する方法がある。（13）が示すように, 今の場合，DPがさらに上方へ移動し，新たなセット {DP_3，CP} を形成することになると，未決定であった {DP, TP} はTPとなりPOPが解消することなる。ただし, 新たに形成された {DP_3, CP} が同様にPOPとなる。この時，このセット {DP_3，CP} がこの段階ではまだCPでないことに着目しよう。そのために，そのラベルなしセット {DP_3，CP} にDがmergeする場合，Dの格素性は主語DP_3とagreeすることができると考えられる。つまり壁となるCPが存在していないからである。[4] その段階でagreeが起き，主語DP_3の属格が認可されると, labelingにinertとなり, よってその未決定であったセットのラベルはCPとなるのである。

（13）



4） CP指定部の要素はCP外のheadとagreeできる。Chomsky（2001）参照のこと。

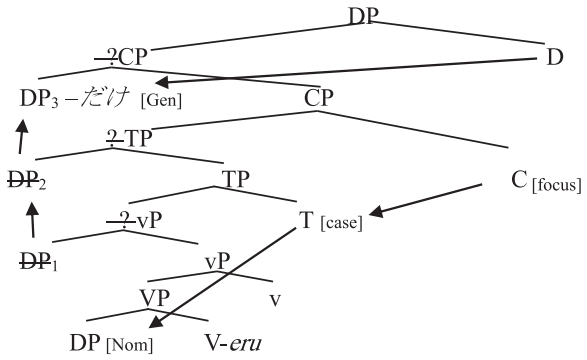
このように，CPが決定される前に，DPの属格が認可されるので，（12）で見たCP介在による認可不可の問題を回避することができる。[5)]

この分析を支持する証拠としてAkaso（2020）は次のような例を挙げている。[6)]

（14）*太郎だけのフランス語が話せること

通常の「が・の」交替では，先の2節で言及したように，focus particlesを属格主語に付加することができない（(5a）を参照のこと)。これはその連体節の範疇がTPであることから説明ができるが，（14）の場合，ここでの分析に従い連体節がCPであるならば，Cの持つfocus素性が利用可能であることから，主語DPに付くfocus particlesは認可されると予測される。にもかかわらず，（14）は非文法的と判断される。Akaso（2020）はこの例こそがここでの分析が正しいことを示すものであるとしている。（14）の構造は次のようになる。

（15）



ここでなぜC-headの持つfocus素性が上に移動したDP_3のfocus particle「だけ」を認可しないのかという疑問が生じるかもしれない。これに関しては，先に述べたMiyagawa et al.（2016）のActivation condition of the focus feature for agreementがカギとなる。格素性の認可が行われて初めてfocus素性が見えるのであるので，セット｛DP_2，TP｝とCがmergeする派生段階では格が認可されていないDP_2のfocus particleは見えない状態であり，Cによって「だけ」を認可するこ

5）なぜ，DP_1やDP_2の段階で，Tが主格を認可しないのかという疑問が生じる。主格・目的格（が/を）や主格・斜格（が/に）の交替もそうであるように，日本語における格の交替はoptionalである。つまり，何らかの理由で，一方の格認可がサスペンドされるという状況が生じるのである。これを格理論の中でどう説明するかは本稿の守備範囲を超えるのでこれ以上触れることはできないが，ここでは，そのoptionalityを前提として議論を進めることとする。

6）戸澤隆広氏から次のデータをご教示いただいた。

(i) 太郎だけフランス語が話せること

格の脱落に関しては，Miyagawa et al.（2019）での考察もあり，今後の課題としたい。

とができない。symmetry-breaking movementによってさらに上に移動した時に，Dによる属格認可がなされることになる。

その際，セット｛DP，CP｝はCPとなることから，そのheadであるCから「だけ」が認可されるのではないかという疑問が起きるかもしれない。確かに，cartography研究では，機能範疇におけるSpec-Headの関係が認可条件の一つとして認められることが多い。日本語におけるFocus移動の着点もFocPの指定部のポジションである。しかしながら，ここで，見落としてはいけないことは，Focus移動は基本的にはScramblingと同種のものであり，随時的であるという点である。つまり，認可のために必ずしもFocP指定部へ移動する必要があるわけではない。移動なしでin-situで音声的にストレスが置かれる場合もある。その点を考慮するならば，Focus移動は，一つの操作ではなく，認可と随時的移動の二つが関与する操作であるとみなすことができる。認可のほうは主要部H（Foc）もしくは関連する素性（focus素性）によってなされるのであるが，その時の条件は，c-command領域が関与していると考えるのは，これまでの研究から支持されるものだと思われる。つまり，C（あるいはその中のfocus素性）がc-command領域にあるfocus particleを認可することが必要であるとすれば，問題となっている（14）における「だけ」の認可は，属格が認可されたポジションでは（Cのc-command領域を外れてしまっているために）Focus認可ができないこととなり，（14）は非文法的となるのである。

以上のように，Akaso（2020）は，D分析にとっての課題であった主格目的語の「が・の」交替が解決できると論じている。

4. high adverbsの問題

ここで，本論文の主題である，D分析の三つ目の問題であるhigh adverbの問題に戻ろう。high adverbsと呼ばれる副詞は，「たぶん」「要するに」のような発話者の判断が関わる副詞である。日本語学では，「陳述の副詞」という名称で知られているもので，一般言語学的には「発話行為の副詞」とも呼ばれることもある。さらに下位区分すれば「残念ながら」のような「価値判断の副詞」や，「おそらく」のような「真偽判断の副詞」などに分類することが可能である。[7] これらの副詞の下位区分は本稿の関心事ではない。重要なことは，副詞は基底生成される構造上のポジションがあるという観察である。[8] その結果，発話行為の副詞，つまりhigh adverbsはcartography研究で明らかになったCP領域の中でもより談話的な性質を含んでいることから，領域の高いポジションで外的併合（基底生成）されると考えられている。high adverbsの名称はそれに由来する。そのために，CPのheadであるCを欠いたTPにはそれらの副詞は現れないということになる。つまり，談話領域との関係がより強いhead/featureを持つCP領域で認可される副詞であるにもか

7） 真偽判断の副詞がCP領域に属するものかどうかははっきりしていない。Miyagawa（2012）はCinque（1999）に従って，副詞「たぶん」をTP領域の副詞であるとしている。なお，本論文では，語としての副詞と句としての副詞類（adverbials）の両方をadverbsと称することにする。

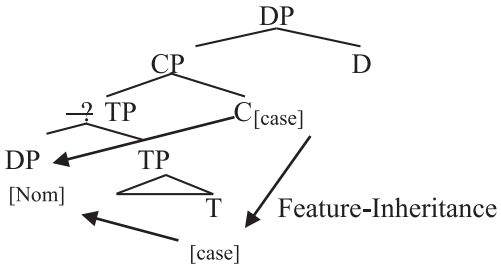
8） この点に関しては，藤巻（2011）を参照のこと。

かわらず，それがCを欠く「の」格主語の連体節において現れるのを許す話者がいる。

この問題は，通常の文と同じ大きさを仮定するC分析にとっては，問題にはならないので，D分析よりもC分析を支持する有利な言語事実であると捉えられている。しかしながら，high adverbsを許すデータがC分析の優位性となることを指摘するだけでは十分ではない。なぜなら，問題の連体節においてhigh adverbsを認めない話者もいることを説明する必要があるからである。つまり，このhigh adverbsのoptionalityは，C分析にとっても問題となるのである。上で見たAkaso（2020）の，主格目的語を含む連体節の分析は，このhigh adverbsの生起の可能性と，判断の揺れの両方を説明することができる。

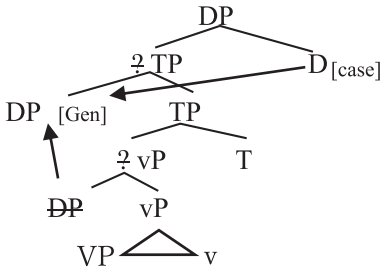
まずは，生起可能性を扱うことにしよう。次の（16）がこれまで考えてきた派生である。まずは，主格主語の場合は連体節の範疇はCPである。

（16）



そして（17）が属格の場合で，連体節の統語範疇はTPである。

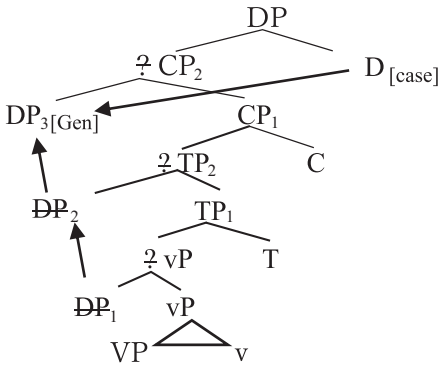
（17）



この（17）では，CPが欠けているので，high adverbsを認可することはできない。high adverbsを認めない話者の派生は（17）のようになると考えられる。

次に，問題になっているhigh adverbsを許容できる派生を考えてみよう。

（18）



CとmergeするＳ{DP_2, TP}Ｓは，この段階ではラベルが未決定である。ここでCによる格認可（主格）が行われると，DP_2はanti-labelingの結果，labelingにはカウントされないものとなり，未決定であったセットにCP（=CP_1）のラベルが与えられる。この派生では，high adverbsは生起できる（副詞がcounter-cyclicに付加されるという立場（(Stepanov（2001)）をとる）が，連体節の主語DP_2の格は「の」格とはなりえない。この段階で，Cによる格認可ではなく，symmetry-breaking movementのoptionが選ばれると考えよう。すると，問題のDP_2はさらに上位に移動し，CP_1とmergeすることになる。ここでもPOPが現れ，ラベルは未決定のままとなる。その未決定のセットＳ{DP_3, CP_1}ＳにD-headがmergeすることになる。この段階で，Dが，DP_3の属格を認可すると，ここで属格主語が現れることになる。同時に未決定であったセットは，DP_3がanti-labelingによって見えなくなり，CP（=CP_2）となる。そしてこのCにcounter-cyclicにhigh adverbsが付加されると，「の」格主語を持つ連体節にもhigh adverbsが現れることになる。

以上，「の」格主語を持つ連体節の中で，high adverbsが出現できる事実を，Akaso（2020）の分析を利用することで説明できることを見てきた。

ここでもう一つの問題である，なぜhigh adverbsを許容する話者としない話者がいるのかという問題を考えたい。この問題は上述のように，D分析のみならず，C分析にとっても問題になる。これに対する解決案は，本稿での派生に求めることができる。high adverbsを認可するには，主語DPがセットＳ{DP, TP}ＳのPOPを避けるために，いわゆるsymmetry-breaking movementの操作が行われる必要がある。再度，CPとのmergeによってPOPの状況が生み出されるが，Dによって属格が認可されると，labelingには見えなくなり，そのセットはCPとラベル付けされる。この場合に，節全体がCPとなるので，high adverbsが生起できる（＝（18））。それに対して，{DP, TP}のセットに，Dがmergeすると，DPの属格が認可され，問題のセットはTPとなる（＝（17））。つまり，その際には，節の統語範疇はTPとなり，high adverbsが外的併合（基底生成）されることができないのである。つまり，Cが派生に入ってくるかどうかによって，この問題を説明することができる。

ここで，論文を終える前に，本分析の支持する一つのデータを紹介しよう。次の（19a）は，high adverbの「幸いに」が，「の」格主語を持つ連体節内に生起している例である。論者の小調

査ではこれを許す母語話者が多かった。それに対し，(19b) の「の」格主語に focus particle「だけ」が付加された場合は容認可能性が落ちるという話者がほとんどであった。

(19) a. 主任は　幸いに田中研究員｛が/の｝見つけた現象を　所長に報告した。
b. 主任は　幸いに田中研究員だけ｛が/*の｝見つけた現象を　所長に報告した。

これは先の（14）で見た現象と同じである。C の持つ focus 素性は c-command 領域内のターゲットを探す必要があるが，symmetry-breaking movement によって上に移動した場合，Focus 認可の領域から属格 DP は外れることになる。そのために，「だけ」の認可ができないために非文法的となるためである。

5. おわりに

本論文では，日本語における「が・の」交替の D 分析を擁護するために必要となる high adverbs の生起について論じた。Akaso（2020）で扱った主格目的語を持つ連体節の「が・の」交替の分析を利用すると，属格主語の格は D によって認可されるが，その節は CP となる場合があり，CP 領域にしか現れない high adverbs が，「の」格主語を持つ連体節でも生起できると論じた。本稿での分析が正しければ，D 分析にとって課題であった三つの問題はいずれも解決できることになり，「が・の」交替の仕組みの解明に一歩近づけたことになる。

REFERENCES:

Akaso, N. (2020) “A Labeling Approach to Japanese Nominative/Genitive Conversion,” Poster/Speed Presentation, Seoul National University International Conference on Linguistics (Syntax-Semantics). Oct 23rd

Akaso, N. and T. Haraguchi (2011) “On the categorial status of Japanese relative clauses,” *English Linguistics* 28: 1, 91–106.

Akaso, N. and T, Haraguchi (2012) “On the Agent/Theme Asymmetry in Japanese Nominative/Genitive Conversion,” *Proceeding of the 8th Workshop on Altaic Formal Linguistics (MIT Working Papers in Linguistics. 67)*, 1–6.

Chomsky, N. (2001) “Derivation by phase,” *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Kenstowicz, M,. 1–52 Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, N. (2008) “On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta, 133–166, Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, N. (2013) “Problems of projection,” *Lingua* 130, 33–49.

Chomsky, N. (2015) “Problems of Projection: Extensions,” *Structures, Strategies, and Beyond: Studies in Honor of Adriana Belletti*, ed. by E. D. Domenica, C. Hamann and S. Matteini, 3–16, Amsterdam: John Benjamins.

Cinque, G. (1999) *Adverbs anf Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*. Oxford: Oxford University Press.

藤巻真一（2011）「副詞のかき混ぜと焦点解釈」『70年代生成文法再認識（日本語研究の地平）』長谷川信子編　開拓社　61–84頁

畠山雄二，本田謙介，田中江扶（2008）「日本語に「長距離」の例外的格付与はあるのか？：Ura（2007）の批判的検討」『言語研究』134，141–154.

Hiraiwa, K. (2001) "On Nominative-Genitive Conversion," *MIT Working Papers in Linguistics* 39, 66–124.

Hiraiwa, K. (2005) *Dimensions of Symmetry in Syntax: Agreement and Clausal Architecture*, Doctoral dissertation, MIT.

Jayaseelan, K. A. (2008) "Topic, Focus and Adverb Positions in Clause Structure," *Nanzan Linguistics* 4, 43–68.

Maki, H., T. Morishita, and K. Tsubouchi (2006) "The Nominative/Genitive Alternation in Multiple Nominative Constructions in Japanese: A Preliminary Statistical Study," *Nanzan Linguistics* 3, 97–122.

Maki, H. and A. Uchibori (2008) "Ga/No Conversion," *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, ed. by S. Miyagawa and M. Saito, 192–216, New York. Oxford University Press.

Miyagawa, S. (2012) *Case, argument structure, and word order*. Routledge.

Miyagawa, S. (2017) *Agreement Beyond Phi*. Cambridge, MA: MIT Press.

Miyagawa, S., N. Nishioka, and H. Zeijlstra (2016) "Negative sensitive items and the discourse-configurational nature of Japanese, *Glossa A Journal of General Linguistics*, 1: 33. 1–0, DOI: http://dx.doi.org/10.5334/gjgl.6

Miyagawa, S., D. Wu, and M. Koizumi (2019) "Inducing and blocking labeling," *Glossa*: *A Journal of General Linguistics*, 4 (1), 141. DOI: http://doi.org/10.5334/gjgl.923

Nakai, S. (1980) "A Reconsideration of Ga-No Conversion in Japanese," *Papers in Linguistics* 13, 279–320.

Nakamura, K. (2012) "Three kinds of wa-marked phrase and Topic-focus articulation in Japanese," *Generative Grammar in Geneva* 7, 33–47.

Nakamura, K. (2014) "*v*P Internal Topic-Focus Articulation in Japanese," 2014 *Comparative Syntax: Proceedings of the 16th Seoul International Conference on Generative Grammar*. 299–309.

Ochi, M. (2001) "Move F and Ga/No Conversion in Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 10, 247–286.

Ochi, M. (2017) "Ga/No Conversion," *Handbook of Japanese Syntax*. Mouton de Gruyter.

Ochi, M. (2020) "Feature Transfer, Left Periphery, and Case Conversion," *English Linguistics* 36, 263–294.

Saito, M. (2016) "(A) Case for Labeling," *TLR* 33, 129–175.

Shimamura, K. (2019) "The Syntax of Nominative-Genitive Conversion in Japanese: Tense and (Shrinking) Clausal Nominalization," ms., lingbuzz/004368.

Stepanov, A. (2001) "Late Adjunction and Minimalist Structure," *Syntax* 4.2, 94–125.

Ura, H. (2007) "Long-Distance Case-Assignment in Japanese and Its Diatectal Variation,"『言語研究』131，1–43.

Watanabe, A. (1996) "Nominative-genitive Conversion and Agreement in Japanese: A Cross-linguistic Perspective," *Journal of East Asian Linguistics* 5, 373–410.